がんばってます！くまもと農業を支える若い力。

――くまもと'86農業フェアフォーラムに出席して

十一月二十二日から三日間にわたり、くまもと'86農業フェアが開催されました。

私は、十一月二十二日、鶴屋ホールで開かれた"フォーラムPART1"に出席しました。これは熊本県青年農業者クラブ（4Hクラブ）連絡協議会が主体となって企画したもので、会場内は若い青年たちや農業学校の生徒らしい制服姿の学生たちで埋め尽くされていました。

熊本県青年農業者クラブ「4Hクラブ」。4つのHの意味も解りました。

毎日、農産物を食べてはいるものの、これまで農業とはほとんど無縁で生きてきた私に、一体どれだけ理解できるだろうかと、やや不安な気持ちで席に着きました。それまでなんとなく耳にしたことのあった"4Hクラブ"の4つのHとは、heart（心）・head（頭）・hand（手）・health（健康）を意味していることを知ったのも、恥かしながら会場に来てからでした。

細川知事は、「世界の先進国はみな農業国であり、一次産品が国を支えている。農業なくして国の発展はない。」という力強い言葉につづいて技術革新の課題や農村の高齢化及び後継者問題にも触れ、今年中に発足する農業後継者育成基金を大いに活用し、明日の熊本農業を若者の手で切り拓いて欲しいと述べられました。

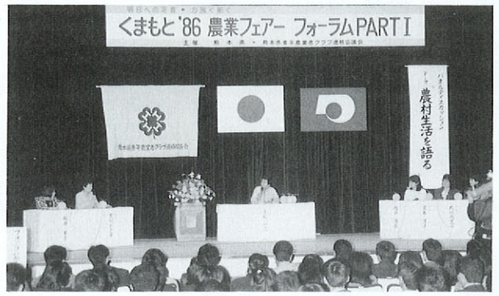
代表者の個性溢れる意見。汗の中で夢をつかんでいく若者達の姿に感動！

次に、県内各地の4Hクラブの代表三名による"青年農業者の主張"がありました。

宇土市の大平光寛さんは、――みかんだけの栽培から、経営の安定化をめざし、カスミソウやカーネーションなどの花き栽培にも手を広げ、個性を生かした農業を実践しています。「どんなに小さな事でもいい、人に勝るところ、人と違った自分を発見して掘り出し、これだと思ったらまずやってみる。」という積極的行動派の青年で、「将来、農業を誰もが憧れるような職業にしたい。大きく躍進するのは今だ!!」と熱っぽく語ってくれました。

くまもと'86農業フェア（サンロード新市街会場）

「ロマンあふれる情熱で明日を拓け我ら青春4H」をテーマに開かれた第26回熊本県青年農業者技術交換大会（S61・8）



ママさん特派員
林 孝子 さん

芦北町の道園浩二さんは、――幼い頃遊んだ田圃や、ばあちゃん特製のいなりずしの思い出話にからめながら現代のパック詰め食品の氾濫を風刺したショートストーリーを披露してくれました。ユーモアたっぷりの語り口に吹き出しながらも、忙しさを口実についインスタント食品に手を出しがちな主婦にとっては、耳の痛い話でした。「今、食卓が大きく変りつつありますが、私達も無農薬でおいしいものを作る努力をしますので、ぜひ食卓を手料理で飾ってください。」と訴えられました。

旭志村の村上洋美さんは、――北海道の農業短大に学び、現在両親や兄と共に酪農を営む娘さんです。四年程前、酪農を始めた当初は、多額の借金を抱え、家族全員夜遅くまで働かねばならず、過労から母親が入院したこともあったと、当時の苦労話もありました。酪農経営をめぐっての家族間での葛藤、そして坐折感。当時の彼女を支えてくれたものは、生まれてすぐに立ち上がろうとする子牛の逞しい生命力であり、北海道での学園仲間たちの暖かい励ましであり、牛への愛情であったのだそうです。「最近になってやっと自己資金で牛を購入できるようになり、毎晩家族でどんな牛を買おうかと語り合っています。将来は同じ農業をめざす人と一緒になり、家族どうしいたわり合いながら大自然の中で力を合わせて生きていきたい。」と結ぶ彼女に思わず胸が熱くなり、心から喝采を贈りました。

そのあと、「地域づくりは若者の手で」というテーマの講演に引き続き、「農村生活を語る」というテーマでのパネルディスカッションが行われました。

「農業は妻にとっても、やり甲斐のある仕事。若妻の力強い意見が印象的でした。

「農家というと立派な家と広い土地、何台もの車というイメージがありますが、いざ自分がそこに嫁ぐとなると、不安の方が先に立ってしまって…。」という都市生活の独身女性たちの意見。それに対して非農家から農家に嫁いだ若妻側からは、「自分の意志で嫁いだとはいえ慣れるまでは大変でした。でも石の上にも三年、今では農業の本当の良さが見えてきました。」「夫婦のふれ合いの時間も多く、若妻会での勉強や交流も楽しみの一つです。農業は妻にとっても大変やり甲斐のある仕事です。」と経験に基づいた説得力のある意見には思わずうなってしまいました。

瞳を輝かせて夢や希望を語る若者たち。私の農業に対するイメージも変わりました。

農業を通じて将来の夢や希望を語り合う若者たちの目は、皆一様に美しく輝いていて無限の可能性を秘めたその情熱的な姿が私にはとても眩しく感じられました。若者たちがそんな風に映るのは、きっと自分が年をとった証拠だな、とひとり苦笑しながらも、ここに来る前とは、農業に対するイメージが自分の中で大きく変ったという確かな実感を胸に、まだ熱気の冷めやらぬ会場をあとにしました。